

織女

伊藤桂一

— 本田 實氏に

私は、星というものは、天の深みで、私たちとはかかわりなく、無心にきらめいているものだと思っていた。少なくとも、そのときまではそう信じていた。

天文台長は、調節した四五〇倍の望遠鏡を私に示して

「ごらんなさい。あれが織女です」といった。

ドームのついた、古びた天文台である。かつて一介の兵隊であったその天文台長は、マレー半島のほとりを、銃と一緒に手製の望遠鏡をかつきながら、いくつかの慧星を発見して歩いた。捕虜になったとき、イギリス兵たちは、彼だけを将官のように遇した。死生の間の、暗い天の一角を、茫とけぶって流れる、ふしぎな慧星の意味を彼はみたはずである。

私が見たのは、望遠鏡の中に、おどろくほど赤い焰をあげて燃えている、天のきわみの一つの星であった。七夕の夜に女性に変身するその、異様な情熱のくるめきをみた。それはいきっているとしか思えない、さかんな焰の説得を私に向けながら、しばしがほど、しっかりと私を酔わせたのだ。

「あの星まで二十六光年です」

と天文台長は静かにいいそえたのみである。

彼もすでに一つの星なのだ、と私は思った。

彼は自身のなかにとしこもり、自身の発光だけをしかみていない深夜ひとりさめて、手袋の、屋根だけが開閉する奇妙な密室で、慧星の行方をのみさぐりつつづけているのである。慧星を追うための、異様な、迫撃砲のようなカメラにとりついていたまま。

私にはまだ、彼のような俗世との途絶はない。私はただ一途にあの織女がみせた、二十六年のはての、あまりに人間的な、激しく純一に燃えつきることによってのみ自らを終えようとしている、焰の意味だけが恋しかったのである。

たとえ五十年にすぎなかったとしても、自身がなにを求めて生きてきたのか、ということ、私には、その星への呼応のなかにさぐりあてた気がする。

天文台長は門のところまで私を送りに来て、それからまた蔦の葉の茂る天文台の入口へ消えて行った。古びた階段をのぼり、星だけの世界に還ってゆくために。

生きていくということの永遠——について、いつか私は彼と語らねばならない。しかし、ひとことも言葉は交わすまい。ただ、互いの何百光年の対座から、沁み出てくるものだけを信じる。